

訣別（梅田雲浜）

妻は 病牀に 臥し 兎は 飢に 泣く

挺身 直ちに 戎夷を 払わんと 欲す

今朝 死別 生別と

唯 皇天 后土の 知る 有り

妻臥病牀兒泣飢
今朝死別與生別
挺身直欲拂戎夷
唯有皇天后土知

解説 ペルーの来航に伴ない、雲浜が大いに時務に奔走中、妻信子および長男・繁太郎は病んでおり、しばらくはみずから介抱につとめていたが、安政元年九月、露艦突如大阪湾にはいるに及び、この詩を賦してその撃退に赴いた。

語釈 ※訣別Ⅱながの別れ。永訣。※病牀Ⅱ病やまいの床とこ。妻信子は二十八歳、肺病にかかり、翌年没した。※子泣飢Ⅱ長女竹子は七歳、長男繁太郎は三歳で病弱。翌々年死亡。※挺身Ⅱ身をぬき出す。まつさきに進む。※戎夷Ⅱ外国、未開の地。また、そこに住む人。※皇天后土Ⅱ天地の神々。

通釈 妻は病やまいの床とこについており、子供達は空腹に耐えかねて泣き叫んでいる。妻子の明日からの生活を考えれば、去ろうにも去れない気持であるが、それをおいて自分はいま一身を投げうって、外敵をうち払わんと出発するのである。今日のこの別れは、死別となるか生別となるか、それはただ天地の神々のみが知り給うところであって、人の予期しうるところではない。